

# 北海道師範塾 塾頭通信

## 「教師の道」

第534号 平成25年4月25日

### 心に沁みる挨拶

人前で挨拶するというのは、なかなかしんどい事です。取り分け気の利いた挨拶をしようとする、大抵失敗します。いろいろな方の名言をひねくり回してみても聞く人の心に届くはずもなく、今日も失敗だったと反省する羽目に陥ります。まあ、失敗だったと自分で自覚できる分まだ救いがあるのかも知れませんが、しかし、そんな挨拶を聞かされる側の立場になったら申し訳ないなといつも反省しています。

さて、4月4日に行われた東京造形大学の入学式での諏訪学長の挨拶が、素晴らしかったと評判になっています(4月18日付朝日新聞)。記事によると、18日朝の時点でフェイスブックの「いいね!」は約2万5千件、ツイッターの共有は4千件近くに上っているそうです。

諏訪学長は東京造形大学の卒業生であり、また、カンヌ国際映画祭国際批評家連盟賞を受けた「M/OTHER(1999年)」等の作品を製作する等映画監督としても知られています。

その学長は、「本日は学長というより一人の卒業生として、私が学生時代に体験したことを少しお話してみたい」と約500名の学生に語り掛け、大きな反響を呼んでいます。



以下、学長の挨拶文を要約して紹介します。

私は高校生のときに一台のカメラを手に入れました。そのカメラで、自分の身の周りのものを撮影するようになると、自然に自分の表現として映画を作りたいと思うようになり、私は東京造形大学に進学しました。

入学式に臨んでいた私は、高揚し、希望に溢れていたと思いますが、しかし、大学での生活が始まると、大学で学ぶことに対する希望は、他のものにとって替わりました。

地方から東京に出てきた私は、時間があるとあちこちの映画館を飛び回り、そこで偶然に出会った人たちの映画づくりをスタッフとして手伝うようになりました。私は彼らの熱気にすっかり巻き込まれ、彼らとともに映画づくりに携わることに大きな充実感と刺激を感じました。私は次第に大学に対する期待

を失っていき、気がつくやうに大学を休学し、数十本の映画の助監督を経験してました。やがて、半ばプロフェッショナルとして仕事ができるようになって自分を発見し、そのことに満足でした。そして、大学をやめようと思いました。もはや大学で学ぶことなどないように思えたのです。

大学には入ることが目的で、入った後はアルバイトと遊ぶことに一生懸命という学生が少なくありません。諏訪学長は、勿論そうした学生ではなかったようですが、大学で学ぶ意義を見失ってしまった時期のあった事を率直に語っています。

しかし彼は、ふと戻った大学で激しいカルチャーショックを受ける事になります。

私はふと大学に戻り、初めて自分の映画を作ってみました。自信はありました。同級生たちに比べ、私には多くの経験がありましたから。しかし、その経験に基づいて作られた私の作品は惨憺たる出来でした。大学の友人からもまったく評価されませんでした。一方で、同級生たちの作品は、経験も、技術もなく、破れ目のたくさんある映画でしたが、現場という現実の社会の常識にとらわれることのない、自由な発想に溢れていました。

授業に出ると、現場では必要とはされなかった、理論や哲学が、単に知識を増やすためにあるのではなく、自分が自分で考えること、つまり人間の自由を追求する営みであることも、おぼろげに理解できました。驚きでした。

大学では、私が現場では出会わなかった何かが蠢いていました。

実社会に出てみると良く分かる事ですが、その中で学ぶ事は間違いなく沢山あります。だからといって、大学で学ぶ事を疎かにしてはいけません。自立するための足腰を鍛え、基礎的なパワーを身に付ける上でも、大学における学びの期間は貴重で重要なものです。

私は、自分が「経験」という牢屋に閉じ込められていたことを理解しました。

「経験という牢屋」とは何でしょう？

私が仕事の現場の経験によって身につけた能力は、仕事の作法のようなものでしかありません。その作法が有効に機能しているシステムにおいては、能力を発揮しますが、誰も経験したことがない事態に出会った時には、それは何の役にも立たないものです。

しかし、クリエイションというのは、まだ誰も経験したことがない跳躍を必要とします。それは「探究」といってもよいでしょう。その探究が、一体何の役に立つのか分からなくても、大学においてはまだだれも知らない価値を探究する自由が与えられています。そのような飛躍は、経験では得られないのです。それは「知」インテリジェンスによって可能となることが、今は分かります。

私は、現場で働くことを止めて、大学に戻りました。

「経験という牢屋に閉じ込められていた」という述懐は、他人ごとではありません。私もまた、「僅かばかりの成功体験に縛られていないか」「自分の経験があたかも全てであるかの様な勘違いをしていないか」反省の日々です。

大学生諸君には、大学で思いっきり学ぶ時間を与えられている事に感謝すべきであり、その与えられている時間を無駄にしないよう、精いっぱい努力を尽くして欲しいと願っています。

諏訪学長の挨拶に対し、経営コンサルタントの佐々木繁範氏は「事件→葛藤→解決→教訓」という流れで構成する、ハリウッド映画の大ヒットの法則が使われているといいます（4月18日付朝日新聞）が、なる程と思いながら、「やっぱり持っている人は違うな」と率直に感心しています。（塾頭：吉田 洋一）